

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学部 二十世紀学専修 2年 角 あかり

初めに、ハイデルベルク・ストラスブール研修 1 日目について報告する。1 日目は、ハイデルベルクにて旧市街・ハイデルベルク城の見学、学生牢の見学、京都大学ヨーロッパセンター・ハイデルベルクオフィスの見学、ハイデルベルク大学の図書館の見学、そして同大学の東アジア学科の見学を行った。

ハイデルベルクは、可愛らしい色合いの街並みが続く、歴史ある落ち着いた街であった。ハイデルベルク城は、戦争の跡を生々しく残した負の遺産としての一面をもつ一方で、精巧な装飾の施された建造物が美しい、非常に立派な城跡であった。学生牢は名前とは裏腹に、学生の横顔の影絵などが壁一面に落書きされた、当時の学生たちの遊び心溢れる場所であった。同建物内にある京都大学ヨーロッパセンター・ハイデルベルクオフィスを訪問した際は、HeKKSaGOn(ヘキサゴン)やオフィスの成り立ち、4 つのミッションについてオフィス長の方からお話して頂いた。学生の立場からみると、欧州に留学した場合、このようにサポートをして頂いて情報を得たり出来る場所があることは非常に心強いと思った。ハイデルベルク大学東アジア学科では、先生から学科や学生数、講義などについて説明して頂いた後、学科内をじっくりと見学した。3 つの図書室には日本に関する多岐にわたる分野の書物が所狭し並んでいて、そこには慣れ親しんだ日本と、日本に暮らす私も知らない日本の歴史や文化があり、非常に感心した。豊富な資料のある、整った、充実した研究環境であると感じた。

そして研修全体を通しては、ハイデルベルクとストラスブールの街・人・雰囲気・食など様々なものを一身に感じる事が出来て、非常に貴重な体験をしたと思う。異国において異文化体験をすることは非常に大切な経験である事を強く実感した。また、この研修では現地の先生や学生、スタッフの方々との交流にも重きを置かれており、自分とは異なった文化の中で暮らす彼らと様々な会話をし、共に食事をしたことは私にとって非常に新鮮で有意義な時間であった。また、ハイデルベルク大学では英語、ストラスブール大学では日本語でワークショップを行い、その後学生同士の交流を行った際には、非母国語でこのように深いコミュニケーションを取ったりディスカッションで熱く議論を行ったり出来るレベルにある学生たちに非常に刺激を受け、自分も今学んでいる外国語の運用能力をもっと磨いていこうと強く思った。そして、学科見学やワークショップ、レセプションを通して自らの学問に対する意欲が非常に高まった。シリア難民問題についてのワークショップにおいては、歴史的観点から、ドイツ・フランス・日本という各国の視点から、また個人個人の視点からなど様々な切り口から考えていった。ここでの議論に終わらず、今後も解決の糸口を考えていこうと思う。更に、日頃から世界の現状や問題に目を向けて自分なりの考えをもとうとも思った。

この研修に参加したことで、国際的な視野も広がり、将来の選択肢もまた一段と広がったように感じる。共同学位が締結された大学、なかなか行く機会のない海外にある大学を訪れて研究環境や講義風景を自分の目で見たり参加したり、また土地や人・食などを含めて様々な面から感じたりすることの出来るこの研修は、海外で学ぶということの現実味が増し、今の、そして将来の自分に大きな影響を与えるものとなり、非常に有意義で濃密なものであった。それに加えて、これから海外留学の機会を積極的に得て海外に出ようという志をもつきっかけとなった。また、普段の大学の講義でも英語講義をとって英語で議論をし、ディスカッションやプレゼンテーションを行う授業を受講して積極的に学ぶ姿勢をもとうと思った。それだけでなく、外国で異文化に触れたことで、自分が暮らす、母国である日本についてももっと関心を持って学んでいこうと思った。今回の研修はあらゆる面からみて非常に有意義で充実した、素晴らしいものであった。